

ダイナミックレポート

`dyndoc` コマンドは、テキストと Stata のコマンドを含む Markdown ドキュメントを HTML ファイル、ワード文書への変換を行います。Stata は Markdown テキストと Stata のダイナミックタグとコマンドを利用してレポートを作成します。

Markdown は、プレーンテキストに基づく書式設定構文を使用したシンプルなマークアップ言語です。Stata のダイナミックタグによって、Markdown テキストの間に、分析結果やグラフなどを挿入することができます。

例 1：ダイナミックドキュメントと HTML ファイルに変換する

Stata のダイナミックタグを含む、`example.txt` という名前の Markdown 形式のテキストファイルを例に解説します。

ソースファイル内で、Stata コマンドや出力など、プレーン テキストで表示したいドキュメントの部分を囲む 4 つのチルダ「`~~~~`」を連続して使用します。「`~~~~`」がないと、Stata の出力は最終的なドキュメントで HTML の一部として解釈され、表示させたい形式にはなりません。これは、作成するのが HTML ファイルか Word 文書かに関係なく適用されます。

2 行目のダイナミックタグ `<<dd_include>>` では `header.txt` を呼び出しています。`header.txt` ファイルには、作成したい HTML ファイルのヘッダとなる HTML コードが含まれます。これは、さらに HTML の書式を定義するスタイルシート `stmarkdown.css` ファイルを参照しています。この書式設定は、Word 文書にも適用されます。

`<<dd_include>>` の後は、1 行間隔を開けて、文書のタイトルを入力します。ここでは、「`dyndoc` コマンドによるダイナミックドキュメントの例」が表題です。また、Markdown テキストなので、`#` タグで見出しを設定できます。

例題の `example.txt` から HTML ファイルを作成するには、これら 3 つのファイルを Stata の作業ディレクトリに配置し、Stata 上で次のコマンドを実行します。

```
dyndoc example.txt
```

コマンドが実行されると、HTML ファイル `example.html` が作成されます。ウェブブラ

ウザ上では次のように表示されます。



実際のファイルは下記のリンクにあります。

<https://www.lightstone.co.jp/pub/stata/example.html>

技術的な注意

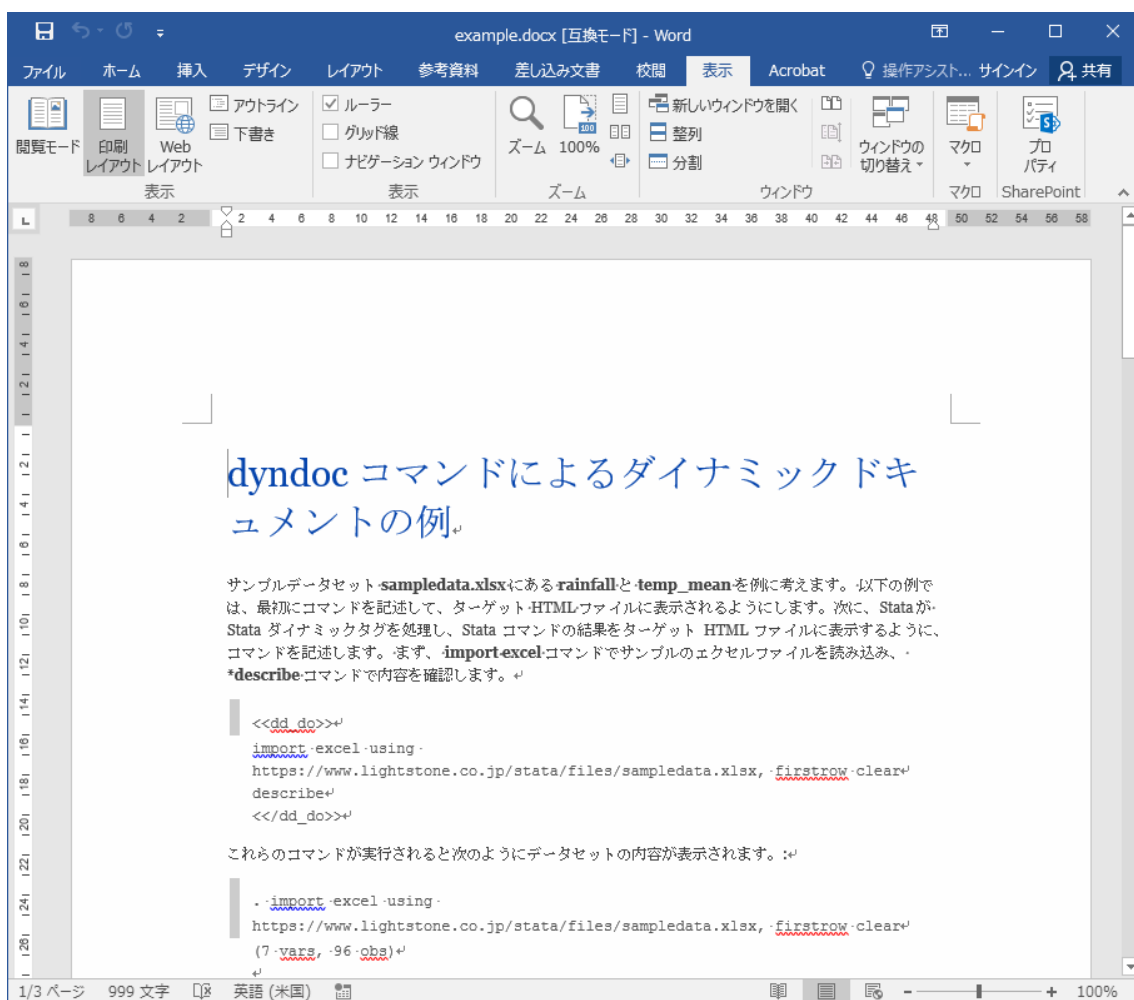
プリフィックスコマンド **quietly** と **capture** は Stata の出力結果を表示させないためのものなので、**dyndoc** 内での使用は推奨されません。

例 2：ダイナミックドキュメントとワード文章に変換する

上記の例 1 と同じですが、**docx** オプションを追加してワード文章に変換することができます。

```
dyndoc example.txt, docx
```

作成された **example.docx** は次のようになります。



例 3：複数レポートの一括作成

dyndoc コマンドではマクロを設定することができます。次のように入力することで、

```
dyndoc ex.txt a b c
```

a, b, c がそれぞれ、Markdown テキスト内のマクロ変数 `1`, `2`, `3` に対応します。

例えば、あるデータセット内の複数の変数ペアをヒストグラムで報告するレポートを、ペアごとに複数作成したいとします。Markdown ドキュメントの<code><<dd_do>></code>タグ内で変数名を直接指定せず、マクロ変数「1, 2, 3」を使用することで、変数ごとにレポートを新たに作成せずに、既存のファイルをそのまま活用できます。実際の変数名に置き換えたマクロ変数はダイナミックタグ<code><<dd_display>></code>で表示させることができます。

さらに、Stata コマンドによる解析の結果に応じて、HTML 文章を変更することも可能です。サンプルの example2.txt の 33-46 行目では<<dd_if>>と<<dd_else>>ダイナミックタグを利用して、処理を分岐しています。t検定の結果によって、帰無仮説が棄却されれば有意差あり、採択されれば有意差なしと報告します。

また、回帰分析を行い、推定された係数を取り出すことも可能です。47 行目以降では重回帰を行い、結果を報告、推定された式を HTML に表示しています。

Markdown ドキュメントの準備ができたら、dyndoc コマンドにウェブ上のデータセット `sampledata.xlsx` のリンクと、報告したい変数名（ここでは `rainfall`, `temp_mean`, `snow`）を追加して、実行します。

```
dyndoc example2.txt
"https://www.lightstone.co.jp/stata/files/sampledata.xlsx" rainfall
temp_mean snow
```

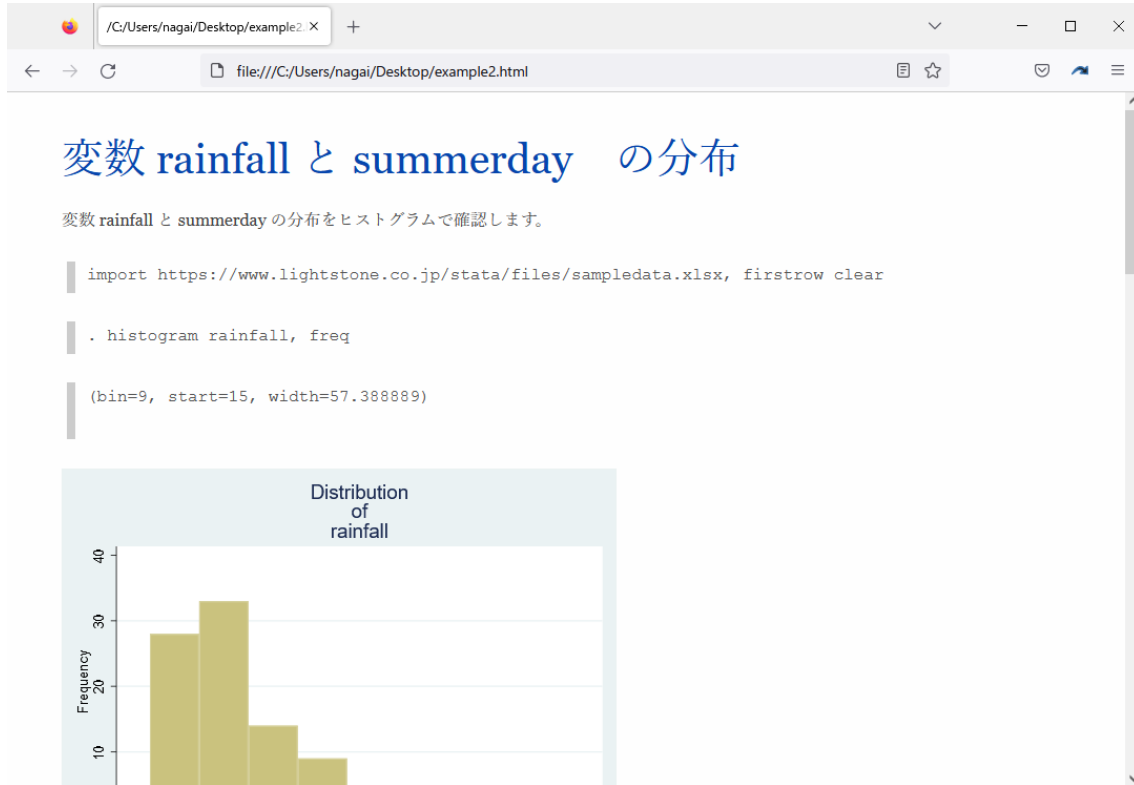
出力結果 example2.html が次のような形で作成されます。



他の変数についてレポートを作成したい場合も、テキストを編集する必要はありません。データセットと変数名を変更して、dyndoc コマンドを実行するだけです。

```
dyndoc example2.txt
"https://www.lightstone.co.jp/stata/files/sampleddata.xlsx" rainfall
summerday snow, replace
```

上を実行すると、次の HTML ファイルが作成されます。



作成したレポートに名前を付けて保存するには、`saving` オプションを追加し、ファイル名を設定します。

```
dyndoc example2.txt
"https://www.lightstone.co.jp/stata/files/sampleddata.xlsx" rainfall
summerday snow, saving(myreport.html)
```

ダイナミックタグ一覧

Markdown テキストで利用できるダイナミックタグ一覧と簡単な説明を行います。タグは下線部分のみで、入力を省略することもできます。

| | |
|----------------|---|
| <<dd version>> | ダイナミックドキュメント作成に必要な最小バージョンを指定する *現在のデフォルトのバージョンは Stata16 リリース時の 2 です。 |
| <<dd_do>> | Stata のコマンドを実行し、結果を表示する |
| <</dd_do>> | <<dd_do>>を終了する |

| | |
|---------------------|--|
| <<dd_display>> | Stata の <code>display</code> コマンドと同様に出力結果を表示する |
| <<dd_docx_display>> | Stata の <code>display</code> コマンドで示されるように、Stata の出力結果を.docx ファイルに含め、ブロック内にテキストをフォーマットする *<<dd docx display>>は、do ファイル内の <code>putdocx</code> テキストブロックコマンドでのみ使用できます。 |
| <<dd_graph>> | Stata のグラフとファイルへのリンクをエクスポートする |
| <<dd_ignore>> | <<dd_remove>>以外のダイナミックタグの処理を無効にする |
| <</dd_ignore>> | <<dd_ignore>>ブロックを終了する |
| <<dd_include>> | テキストファイルのコンテンツを表示する |
| <<dd_remove>> | <</dd_remove>>までのテキストを削除する |
| <</dd_remove>> | <</dd_remove>>ブロックを終了する |
| <<dd_if>> | if 条件でテキストを処理する |
| <<dd_else>> | if 条件でテキストを処理する |
| <<dd_endifi>> | <<dd_if>>ブロックを終了する |
| <<dd_skip_if>> | if 条件でテキストをスキップする |
| <<dd_skip_else>> | if 条件でテキストをスキップする |
| <<dd_skip_end>> | <<dd_skip_if>>ブロックを終了する |